BURRN/ 2006年7月号　平成18年7月1日発行（毎月1回1日発行）第23巻・第9号・通巻315号　昭和60年3月4日第3種郵便物認可

THE WORLD'S HEAVIEST HEAVY METAL MAGAZINE

BURRN!

COMING TO JAPAN IN JULY!!

KISS

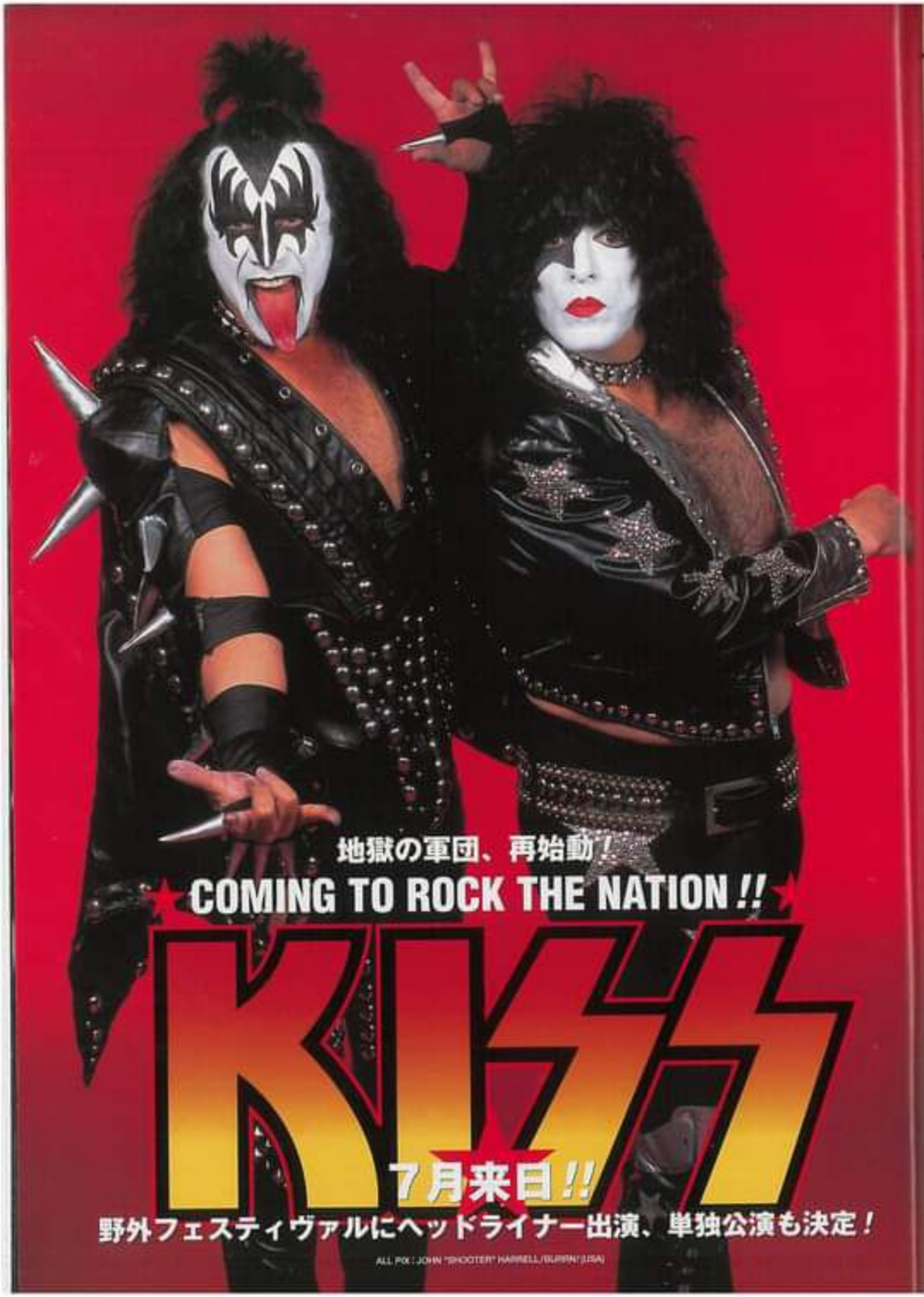
INTERVIEWS WITH ALL THE MEMBERS!!

BON JOVI

ROOSTER
DEF LEPPARD
FAIR WARNING
CHILDREN OF BODOM

POSTER DAVID COVERDALE [WHITESNAKE 1984]

7
JUL ✱ 2006
Gene Simmons(l.)
& Paul Stanley
[KISS]



ALL PIX : JOHN "SHOOTER" HARRELL/BURRN! (USA)

EXCLUSIVE INTERVIEW WITH

GENE SIMMONS

by JOHN "SHOOTER" HARRELL/BURRN! (USA)

THE TONGUE-WAGGING, BLOOD-SPITTING DEMON

日本ツアー後に何が起こる!?　ジーン・シモンズが明かすKISSの今年度以降の事業計画とは…？

33年経っても大きな会場を満員に出来るロック・バンドは今の世界にはそれほどいないが、KISSはそれが出来るバンドだ。今は、(この四半世紀の大半がそうであったように) 超てがジーン・シモンズとポール・スタンレーという2人のオリジナル・メンバーに委ねられているが、映画は気にしていないようだ。何故なら、KISSは時代に左右されないバンドだからである。私がこの原稿を書いている今、彼らは7月後半に予定されている日本ツアーのリハーサルを行なっている。彼らは「UDO MUSIC FESTIVAL 2006」でヘッドライナーを務めるのだ。バンドはこのことに非常にエキサイトしている。彼らは常にKISSの事業や個人のプロジェクトで非常に忙しくしているが、当分の間、この日本ツアー以外にKISSとしてのライヴを行なう予定はない。

私にも初期からのKISSの楽しい思い出がある。彼らは最初から、誰もやっていない独特のショウを見せてくれた。登場した時から批評家達には馬鹿にされたが、バンドが彼らの酷評に耳を貸そうとしなかったのは幸運なことだった。そうでなければ、2006年にはKISSは存在していなかっただろう。最近は活動のペースを落としている彼らだが、その状態は彼らにとって問題のないものだ。彼らは静かに姿を消していくわけではない。

そう、間違いなくKISSは今も活動中である。これからお届けする一連のインタビューを読めば、今の彼らがどういう状況にあり、何を考えているのか、どういう計画があるのか、超てが判るだろう。まずは、ベース・プレイヤーのジーン・シモンズからだ。彼は、誰よりも強い意志を持った人物だ。KISSという発明品を生み出した1人として、彼は常に勝算が低い方に賭け、超ての賭けに勝ってきた。彼の友人でありバンドのパートナーであるポール・スタンレーがそうであるように。

ジーン・シモンズは、金とセックスとビジネスとKISSのことを1日24時間、週に7日間考えている。但し順序はいつもこのとおりとは限らない。彼は今回、多忙なスケジュールの中で貴重な時間を割いて私の写真撮影とインタビューに応じてくれただけでなく、近いうちにこのインタビューの続きをやりたい、と言ってくれた。彼の考えることは多く、話は尽きないのである。

――もしもKISSが1972年に発掘されず、今、考え出されていたとしたら、それでも上手くいくと思いますか？

ジーン・シモンズ (以下G)：(長い沈黙) そうだな、上手くいくはずだよ。だが、全く異なる意味を持っているだろうね。

――音楽的に時代が違うから？

G：文化的にだ。今は人間も違う。我々が登場した時は、サンフランシスコから出てきたヒッピーが大勢いた。だから、違う時代なんだ。BEATLESは "All You Need Is Love" と言ったが、あれがもう少し後に出ていたら、どうだっただろう？　ヒットはしただろうが、文化的には異なるインパクトを与えていたはずだ。

――KISSは時代に左右されないと思いますか？

G：そんなことは私にはどうでもいい。そんなことを気にしたこともないし、そんな意図もない。最初はただ、夢を現実にするだけのものだったんだ。唯一期待したのは、レコード店にレコードが並ぶことだったが、もしかしたら、そのレコードは自分が参加する最初で最後のレコードになっていたかもしれない。

――この話題を持ち出した理由は、このバンドは常に変化を続けているように思えるし、あなたとポールは「KISSは永遠に続く」というステートメントを出しているからです。

G：そうなると信じているよ。もしかしたらファンが望むやり方でではないかもしれないが、こういうのはどうだい？　「KISSコーヒーハウス」の1号店がノースカロライナ州のマートルビーチにオープンするし、「KISS BABIES」というアニメ番組のTV放送が始まるし、ブロードウェイでの演劇や映画など、あらゆるものがあるよ。

――でも、このバンドに関して言えば、勿論エース・フレーリーとピーター・クリスはいなくなって、戻ってこないし……

G：いや、エースはラスヴェガスで行なわれる「VH-1 Honors」に出席するよ。

――ええ、でも、彼はこのバンドには戻ってこないでしょう？

G：予定はない。

――ある日、メンバー全員が入れ替わって、オリジナルとは全く違うバンドになってるかもしれませんね。そのバンドにいるのは、トミー・セイヤー、エリック・シンガー、そして誰か2人があなたとポールの後任となっている。(笑)

G：私がルールについて考えていることの1つは、つまり、ルールについての当出のルールは、ルールとは破られるまでがルールであり、ルールを破ったら、今度は新しいルールを作る、ということだ。これは非常に興味深いことだよ。ルールが出来る前には誰も何も期待していなかったのに、我々が何かをやり始めた途端、ファンは、そうでなくてはいけない、ずっとそうであり続けなくてはいけない、と言い出した。しかし、実際には、バンドが誕生したからルールが出来たのであって、彼らは、たとえそれが冒頭から出た言葉だったとしても、評価を下す資格を持っていない人達でしかないんだ。ファンには最大限の敬意を払っているが、しかし、彼らが言う方向性を受け容れたことは一度もない。ライヴでどの曲をプレイしろとか我々のキャリアをどうしろといった指図を私に出す資格はファンにはない。我々が他の人々の言うことに耳を傾けていたなら、そもそもKISS自体が存在していないだろう。

――あなたとポールの関係は何ですか？　別々の人間ですが、このバンドの方向性に関しては、同じところに焦点を定めているようです。そして、お互いに信頼し合っていますね。

G：これだけは言っておかなくてはいけないが、結局のところ、尊敬出来る人間を見つけるのは難しいことだよ。私と彼の関係の中心にあるのは、彼に対するとてつもなく大きな敬意だ。彼は時々私に失望するけれど、それは仕方がない。彼は最高だと思う。ステージの一番前に出てポールより良い仕事をする人間は1人もいないと思う。彼は誰よりも上手く歌うし、誰よりも才能がある。彼はとにかくベストだ。そして、考え方という点について言えば、彼の方が私よりも遥かに純粋主義者の考え方に近いものを持っている。私はかなり商業重視だ。私は金が最高の報酬だと考えている。金を出すと言うのは誰でも出来るが、実際に金をテーブルに置けるかどうかはまた別の話だ。だから、実際にチケットを買ったり何かを買ってくれたりするという行為の方が、言葉よりも説得力がある。"Put your money where your mouth is (口を出すなら金を出せ)" というのはただの決まり文句じゃない。誰でも言いたいことを言っていいが、それを実現させるために実際に金を注ぎ込んでいるか？　肝心なのはそこだ。

――「ROCK THE NATION! LIVE!」という新しいDVDが出ましたね。日本では1ヵ月ほど前にリリースされました。あなた達はここ数年、セットリストを少しずつ変えて、今はとても興味深いものになっているようです。理想的なセットリストに辿り着くまで、どうしてこんなに時間が掛かったのですか？

G：本当に正直に言ってしまえば、トミーは何でもプレイ出来てエースには出来なかったという正当な理由がある。私はエースのことは猛烈に愛している。しかし、エースに彼のギター・パートを教えたのはトミーなんだよ。エースは思い出せなかったのでね。

――エースとピーターが、このバンドから出ていかなくてはならないような事態を自ら招いたことを、あなたはどのように受け止めましたか？

G：あれには酷く落ち込んだよ。気が滅入ることだね。何故なら、エースとピーターは私と同じ人生を歩むことが出来たはずなのに、そうなっていないからだ。そのことで誰を責めればいい？　ジーンは本当に酷い奴だ、という風にかい？　私が一体何をしたというんだ？　時間どおりに来て、四の五の言わずに自分の仕事をすればいいだけの話なのに。本当に憂鬱な気分になってしまうよ。しかも、皆が知っているように、エースとピーターが自分達の人生をブチ壊しにしたのは一度や二度じゃないんだ。三度だよ！　ステージに上がって、楽しんだうえに、誰よりも沢山の金を払ってもらえて、女達にも何にも不自由しないライフスタイルが送れるチャンスなんて (笑) 誰にでも与えられるものじゃない。何も文句は言えないよ。私がホテルの部屋が酷いと言うのを誰も聞いたことがないと思うし、TVを窓から放り投げたことも、時間どおりに現われなかったこともない。

ROLLING STONESを見てみろよ！　何と素晴らしいバンドだ。ヘロインをやっていようと何だろうと、彼らは今でも時間どおりに現われる！　彼らは仕事をこなし、彼らがステージを降りた時、人々は幸福になっている。そういうことだよ。

――あなたが落ち込んでいるのは、エースとピーターの2人が自分達の人生を放棄したからなのですね？　あなたは彼らの友人として、またバンドの仲間として、2人がもっと良い人生を送ることを望んでいたし、彼らが素晴らしい時間を過ごして素晴らしい生活を送り、あなた方全員で築いたもので得た成功を分かち合いたかったのに、そうならなかったので…。

G：彼らは自分達でそうならないことを選んだのさ。崩壊した家庭と何ら変わらないよ。父親が酔っ払い、家族に酷いことをする。誰もが苦痛を受ける。そして、ついに彼が去っていく時、残った家族は、自分で破滅させたのだ、と言うしかない。そのため、父親は窮地に陥り、最後には自殺してしまう。だが、誰を責めることが出来る？　母親と子供達を責めるのか？

――おっしゃるとおりです。とても残念なことです。このバンドは活動のペースを落としつつあると思いますか？

G：いや、ただ、自分達のスケジュールに従って動いているだけだ。バンドとはステージに上がってプレイするものだと思われているが、それは我々の定義ではない。我々は、我々がプレイしたいと感じた時に、プレイしたいと思った人の前でプレイする。証明しなくてはいけないと感じるものは何もないし、証明しなくてはいけないと感じる相手もいない。KISSは誰にも何も証明する必要はないと思うし、ここで座っている時も、私達は今まで誰もやっていないことをやっているんだ。

――ライヴをやる時に、あなた自身があまり気にしない部分はどこですか？

G：私はライヴの舵でに気を配っているよ。オープニング・アクトが誰で、彼らがプレイするのは何時から何時までか、ということから、私達がプレイするのは何時から何時までかということまで、あらゆることを気にしている。舵てがショウの一部だからだ。チケットを買う人は、ショウのKISSの部分を観るためだけに買うのではない。私達にはチケットを買ってくれる人達への責任があるのだから、舵てが上手くいくようにしなくてはいけない。

――7月に、「UDO MUSIC FESTIVAL」のヘッドライナーとして日本に行くことになっていますね、ミスター・ウドーから、このフェスティヴァルのヘッドライナーを務めてくれと依頼されたわけです。あなたは物議これまでに数えきれないほどのショウを経験してきていますが、これまで体験した中で、ショウの間にステージの上であなたに起こった出来事として一番風変わりだったのはどんなことでしたか？

G：赤ん坊がステージの上で泣いているのを見つけたよ。もう少しでつまずくところだった。それから、頭を振りながら、私の赤ん坊にサインして！と叫んでいる女性が見えた。

――赤ん坊にサイン!?（笑）

G：ああ、クレイジーなことだよ。1歳になる少し前ぐらいの赤ん坊だったからね。だが、ちょっと受難になる出来事でもあった。重量を考えたらね。私は覚えていないんだが、赤ん坊が耳栓をしていたことを祈るしかない。

――今、バンドにはレーベルとの契約がありません。頭の良いビジネスマンであるあなたなのに、何故、もっと昔に自分達のレーベルとして「KISS Records」を立ち上げ、良い配給体制を整えて、自分達の作品を全部そこから出そうとしなかったのですか？

G：やったよ、やったよ！　「Sanctuary」との契約がそれだったんだ。

――でも、今はそれも終了していますよね。

G：そのとおりだ。この業界は変化するものだが、また変わろうとしている。

――新しい契約か何かを探しているところですか？

G：もう少しで判る。

――オリジナルのレコーディングのマスターは全部あなた方が所有していますか？

G：それは秘密だ。

――何年か前から沢山のコンピレーション・パッケージがリリースされていますが、その中で私が気に入っているものの1つが初期のビデオです、ビデオ・カセット・レコーダーが発明されるずっと前のTV番組からのものですよ。ブートレッグも沢山出回っていますが、KISSとして、そういうものを手に入れて、例えば、1974年のモノクロの「Winterland」、あるいは1975年か1976年の「Cobo Hall」のコンサート全編をリリースしようと考えたことはありませんか？

G：いずれそのうちに。

――では、全部手配中なのですね？

G：最終的にはね。舵てをやる時間はある。

――素晴らしい！　違うアルバムに同じ曲が入って新たなパッケージでリリースされたりする作品の多さにKISSのファンは驚き、腹も立てていたと思いますが、全盛期のバンドを記録した本物の映像がリリースされたら、本当にクールでしょうね。ビデオ・プロジェクション・スクリーンがコンサートで最初に使われたのは1975年だったと思いますが、あなた達は、それ以来、ずっと使っていますね。今のKISSは、ヴィジュアル・バンドとして、ヴィジュアル作品の方に焦点を合わせているのでしょうか？　スタジオ・レコードを書いたりレコーディングしている様子はないし、これまで以上に停止状態のようですが。

G：私達は何にも焦点を合わせていないよ。その時その時で片付けているし、全部を片付けようとしている。

――そのやり方は、これまでのこのバンドとあなたのやり方とはちょっと違うように思えますね。過去のあなた方は、明らかに、いつも何かに向かって動いていた、あるいは、実際に何かをやっていましたよ。

G：今も何かをやっているよ。沢山やっている。

――でも、日本でのショウを除いては、今はツアーはやっていませんよね。

G：やっていない。準備が整えばやるし、整わなければやらない。証明しなくてはいけないことは何もない。

――では、次の時代のKISSには何が起こりますか？

G：そのままチェックを続けてもらわないといけない。我々にはあらゆる種類のプランがあるが、プランについて話をしても、プランというのは変わりやすいし、変わると人々は腹を立てる。「でも、あなたは先週、KISSは月を買う予定だと言ったじゃないですか？」と言って、私を責めるんだ。プランは時々変わるものだが、彼らは動転する。しかし、もう一度言っておくが、ファンは、たとえ善意からであったとしても、プランにコメントをする資格は持っていないんだ。その資格は決して手に入らない。何故なら、彼らは事業に携わったことがないからだ。これは大きな事業だよ。そして、大きな事業というのはあらゆるタイプの計画を立てるが、その計画は変わることもあるし、変わらないこともある。だからこそ"プラン"と呼ばれるんだよ。だが、ファンはそれを理解していない。「月を買うつもりだと言ったと思ったのに」と言って、腹を立てる。ああ、そのつもりだったが、考えを変えたんだ。だから、私は"プラン"について話すのをためらうのさ。■■

EXCLUSIVE INTERVIEW WITH

PAUL STANLEY

by JOHN "SHOOTER" HARRELL/BURRN!(USA)

STAR CHILD...HE STILL HAS STARS IN HIS EYES!

人工股関節置換手術の経過は？　そしてソロ・アルバムは？　ポール・スタンレーに訊く！

過去にジーン・シモンズはポール・スタンレーのことをKISSのリングマスター（演技主任）だと表現したことがあるが、それは事実と掛け離れてはいない。彼は完璧なフロントマンとして、踊り、意気揚々と歩き、高い位置で踵し踵りをし、記憶に残るKISSの曲を観て、大声で歌っている。まさに、ノンストップのミスター・エンタテイナーだ！　それを33年以上もやり続けている秘密は何なのだろう？　ポールと話していて判ったのは、どうやらそれは"情熱"らしい、ということだ。そう、世界一素晴らしいショウをやっているのだから、情熱を持たずにいられるはずがない！

ジーンが、様々なプロジェクトやマーケティングやマーチャンダイズやTV番組や事業の計画で忙しくしているように、ポール・スタンレーも、1978年以来となる彼のソロ・アルバム、新しい妻、もうすぐ誕生する赤ん坊、彼が描いた様々な絵画の発表等で、ずっと忙しい。取材を通して彼が描いたKISSのオリジナル・メンバー1人ひとりの肖像の複製が入手可能になっているのだ。それだけでなく、彼は、この何ヵ月かの間に、人工股

BACK FOR MORE ➡ Interview with Gene Simmons：1985年2月号/1985年5月号/12月号/1988年7月号/1989年2月号/1992年5月号/10月号/1993年7月号/1995年4月号/1996年7月号/1997年3月号/1998年2月号/1999年1月号/2002年9月号/2003年1月号/2004年6月号

関節置換手術を2回も受けている。

このインタビューで、"スター・チャイルド"ポール・スタンレーは、彼のソロ・アルバム、ジーン・シモンズとの人生、KISS、次の舞台について話し、時に感傷的にもなる。本当に素晴らしいインタビューになった。何故なら、ポールと話すことは、普段の会話のようであり、彼はどんなことをとても判りやすく話等してくれるからだ。正直に事実を話してくれる彼は、ロック・スターの中のロック・スターである。さあ、ポール・スタンレーの登場だ。

――お元気でしたか？　結婚し、もうすぐお子さんが誕生することになっていて、素晴らしいことが続いているのは知っています。人工股関節置換手術について教えてください。一体、あなたの股関節に何が起こったのですか？

ポール・スタンレー（以下P）：長年ライヴでやっている大振りの回し蹴りで、左の股関節をすり減らしてしまってね。ブーツは無関係なんだ。右の股関節は大丈夫だからね。左はいつも軸として使っていて、キックする時は、左脚に体重を掛けていたんだ。左脚は最後までそのままで、回転が最大の状態になった時に身体を持ち上げて回す。だから股関節軟骨をすり減らしてしまい、それは1988年からずっと俺を悩ませていたんだ。

――18年間も痛みを抱えていたんですか!?

P：ああ、どんどん悪くなって、リユニオン以降、ツアー中は常に注射を打っていたんだ。しかし、「ROCK THE NATION TOUR」の途中で、もはやステージに立つことで生じるアドレナリンの放出でさえ、この痛みをごまかせなくなったと自覚した。ステージの上で足を引きずっていることに気付いたし、ステージへの階段を上がる時にも足を引きずらなくてはいけなくなっていた。何とかしなくてはいけないという状態にまでなっていたので、人工股関節に取り替えることにしたんだよ。統計的には95%は上手くいくと言われているが、それは、5%は上手くいかないという意味でもある。俺はその5%に入ったんだ。最初の手術を終えて、歩き始めた時、上手くいかなかったことを感じていた。完全にではないが、股関節の骨が、関節を受ける部分から滑るのが感じられたんだ。だから、2回目の手術を受けることにしたのさ。

――3回目の手術も必要になるのですか？

P：正直な話、3回目の手術を受ければ治る可能性がある問題も、まだあるんだ。だが、当面は何もしないでおこうというのが俺の考えだよ。俺はもう、日本に行ってショウをやる準備が整っている。トレーニングもしているし、何もかも、以前のようにやっている。もう大丈夫だよ。

――前よりは良くなっているんですよね。

P：前よりは良い。希望どおりではないけどね。

――少なくともツアーは出来る、と？　手術後、初めてのツアーになるわけですよね。

P：2回目の手術を受けてからまだ4週間後ぐらいの時に、キャンプ・ペンドルトン（カリフォルニアにある米軍基地）で兵士達のためにプレイしたんだ。俺は一体ここで何をやっているんだ、と思ったよ。その後、オハイオでも1回コンサートをやっている。万全ではないが、大丈夫だ。痛みを抱えたままで沢山のツアーをこなしてきたから、状況はどんどん悪化したけれど、これが仕事だからね。これからのことを楽しみしているよ。手術をした方の脚を軸に、また頭より高い位置にキックが出せるようになって嬉しいよ。

――ジーンは、あなたのことを、兄弟のような存在だと言っています。あなたにとって、彼との関係はどんなものですか？

P：俺とジーンの関係は家族のようなもので、共に過ごした長い時間が生んだ強い絆で結ばれているんだ。他の何物にも替え難い経験を共にしてきたという絆は、とても強くて深いものだよ。共に生きた人生に基づいたものだからね。家族ではあるが、2人とも境界線がどこにあるか知っているから、その関係はその時によって変わる。誰かに対して非現実的な期待を抱かなければ、落胆させられることもない。だが、人間というのは時々迷ってしまい、それを忘れてしまうんだ。俺達は家族だ。兄弟のような仲だ。だが、それはいつも一緒に過ごすという意味ではない。

俺達は、本当に長い付き合いだよ。最高なのは、俺達のどちらも、自分のやり方を通したいとか、自分が正しいことを証明したいという気持が原動力になっているのではないということだ。2人とも、このバンドにとって正しいことをやるんだという気持が原動力になっている。どちらか1人がもう1人に「お前がそれほど強く感じているのならお前のやり方でやってみよう」と言うことが多い。素晴らしい関係だよ。

――強い信頼関係があるんですね。

P：このバンドに対する気持は純粋なものだからね。利己的な下心が動機ではないから素晴らしいんだよ。そして、それぞれがこのバンドの外でやっていることはお互いに関係のないことであり、この関係は、純粋にKISSの一部として俺達がやることを中心に動いているんだ。

――KISSについてもが興味深いと思うのは、ジーンが何かにつけて会話に滑り込ませるBEATLESとの比較です。彼はいつも、アメリカではBEATLESよりもKISSの方がゴールド・レコードを多く受賞しているとか、いろんなことに対してBEATLESとKISSを比較したり、BEATLESの例を引き合いに出しますよね。BEATLESはジョン（レノン）、ポール（マッカートニー）、ジョージ（ハリスン）、リンゴ（スター）の4人のキャラクターが確立していて、皆、ファースト・ネームで呼ばれます。KISSもポール、ジーン、エース、ピーターとファースト・ネームで親しまれていますね。もっとも、今はトミーとエリックですが、トミーは語呂が悪いので、トムに変えさせたらどうです？（笑）

P：俺がBEATLESと比較するとしたら、ごく表面的な、誰の目にも明らかなものに留めるよ。自分達を同列に並べるなんて、BEATLESが行なったことの意味深さを考えたら、あまりにも近視眼的だし、俺はそうではないからね。その比較は、俺達は昔からずっと4人の個性を確立させたいという希望を持っていたという意味では成り立つと思う。そして、その結果、人間というよりも、4つの偶像的なイメージ、4体のキャラクターが出来上がったんだ。俺は前に言ったことがある。世界のどの地域の人達でも、写真を見ただけでKISSは判ると。殆どの人達はメンバー全員の名前を言うことは出来ないけれど、キャットだ、スペースマンだ、という風に言うことは出来るだろう。

しかし、メンバー達がそれぞれに異なる予定表を持ち始めた時、あるいは、大事なものがそれぞれ違ってきた時に気付いたことがあるんだと思う。つまり、我々が築いたこの4つのキャラクターの個性が、ジラフボーイだのタイガーマンだのといった新たなキャラクターを世に送り出すことで薄められるべきではないということが明らかになったんだ。それで、あの4体を偶像として守ることが大切になった。KISSを見せる時に俺にとって一番大事なのは、人々が見ているのが伝説の体現であるということであり、俺達が創り出してきたもの、そして信じているものの結てを見てもらうことなんだ。

――あなた達が創り出した4つの人格は、実際にはあなた達の第二の自我であるとジーンが言うのを聞いたことがあります。

P：彼かに俺達の人格から飛び出した分身ではあると思う。ジキルとハイドの関係とは違うよ。4人の人間それぞれの個性を具現化したものから生まれたんだ。しかし、その人格とそのキャラクターは独自の生命を得たんだよ。

――トミーとエリックは前のメンバーのオリジナルのキャラクターを使っています。ファンはそれを嫌だと感じていると思いますか？

P：例えばライヴで"Parasite"をプレイしなかったら嫌だと思うファンだっているだろう。俺達の決断に誰もがいつも満足出来るとは限らないよ。このバンドを好きになった理由が、俺達が俺達のやり方でやっているからだったら、自分の思いどおりにならないからって気にしてはいられないはずだ。長い目で見れば、このバンドが生き残って前に進むことの方がいつだって大事さ。メンバーの誰かのせいで方向性を変えたり、俺達が30年間掛けて築いてきたものを諦めたりすることよりもね。新しいキャラクターを作るべきだと感じる人がいるかもしれないが、それは、突き詰めれば、バンドもファンもごまかすことになってしまう。俺も理解はしているが、それは善意から出たものであっても不適切な希望だよ。

――KISSは永遠に続くと言われてきたことがやっと私にも納得出来るようになりました。理解も出来るようになりました。何故なら、この4つの個性とキャラクターがある限り、最後までメンバーを替え続けることが出来るのですから。5年後、10年後には、全く異なるメンバーから成るバンドになっている可能性もあるわけです。スパイロという男がジーンの代役を務めた（註：日本のCMでの出来事）こともあったし。今、彼はKISSの組織で働いていますから……

P：いや、スパイロはジーンの代わりにバンドで演奏したことはないよ。今のバンドは、どのオリジナル・メンバーの在籍期間よりも長く続くべきだし、実際、続くだろう。それが俺が信じていることだ。俺は最初からここにいて、組てのメンバー、組てのラインナップを知っている。どんな時でも、俺達がステージに上がれば、それはKISSだ。時間は、ショウが始まる前は、今のラインナップにはトミーとエリックがいると考えたりするけれども、幕が落ちて演奏が始まった途端、彼らは俺達を観て、俺達を聴く。そして、トミーやエリックがいて云々といったことは問題ではなくなるだけでなく、そんなことを考えたことすら忘れてしまうんだ。何故なら、それがKISSだからだよ。ピュアでシンプルな話だ。内部にいる俺が引き込まれてしまうのだから、ファンが引き込まれてしまうのは明らかだ。彼らがそうならないことを選ぶなら、それは本当に意識的な決断だよ。

今のKISSはとても良いし、いくつかの意味では、これまでのどのKISSよりも良い。「ROCK THE NATION TOUR」でアメリカやオーストラリアを回った時、俺達は毎晩セットリストを変えることが出来たが、それは10年ぐらいやれなかったことだったんだ！　しかも、それは何かの再創造ではなく、ある精神状態と信念と水準の高さの継続だった。こういう言葉は前もって念入りに考えられたもののように聞こえるかもしれないが、さっきも言ったように、俺は、毎晩その場にいるんだ。俺達が集まった最初の日からずっといる。

1974年か1975年にオーストラリアの小さな劇場で単発の特別なショウを何回かやった時は、俺はぞくぞくするような感覚を覚えたよ。このバンドが今持っている心も魂も躍動感もサウンドも、当時も確かにあったんだ。

――私はこのバンドを1975年から観ているので、その感覚は理解出来ます。リユニオンの最後の方では、ピーターの演奏はどんどん遅くなっていって、曲は重くなり、KISSの特徴である躍動感もうっとりさせられる魅力も感じられませんでした。あなた達は上手くやっていましたが、違いがあるのは判りましたよ。そして、今はエリックとトミーが入って、新しい部品、新しいエンジンに交換したようですね。

P：俺はいつも言っているんだよ。もしも、オリジナルのラインナップに戻りさえすれば、1976年、あるいは1996年の状態に戻せると信じているなら、それは思い込みに過ぎないと。あれはもう終わったんだ。数えきれないほどの理由があって、終わったんだ。俺は今、エースのことが、多分、彼がバンドにいた時よりも、好きだよ。彼と話すのを楽しみにしている。電話で1時間話すこともあるし、先週も彼と話したよ。時間は流れるんだ。終わったことは終わったこと。だからといって、これまでやってきた素晴らしいことと縁を切るという意味ではない。俺達について何かを言うのは構わないが、今やれることではなく過去にやったことに縛られているのかもしれないということは知っておくべきだ。

――先ほど、セットリストを変えて違う曲をやっているという話が出ました。決まりきったスタンダード・ナンバーだけを毎晩やって、それがあなたとジーンには"安全"であると感じられた時期があったのですか？

P："安全"というんじゃないな。あれは、とにかく最悪だったよ！　俺には、どうして同じ曲ばかりプレイしているんだと訊いてくる人達を納得させることが難しかったよ。俺自身、納得出来ないんだからね。それ以外に選択の余地がないんだと正直に告白せずにすむ理由が思い付かなかった。俺はファンと同じように感じたんだよ。俺達はリユニオン・ツアーからフェアウェル・ツアーまで、実質的には同じセットをずっとプレイしていたんだ。本来、そうする理由はなかったし、またあってもいけなかった。俺達には選べる曲があまりにも沢山ある。しかし、残念なことに、その他の要素もあまりにも多くあり過ぎた。そしてそれは、繰り返しになるが、バンドにとってフェアなことではなかったし、ファンにとってもフェアなことではなかったよ。

――それで、エリックとトミーは、あなたとジーンが他の曲をやりたいと思うようになるくらい、催促したり刺激したりするのですか？

P：勿論だよ。それが本来あるべき姿なんだ！　全員が協力し合ってそれぞれの仕事を完璧にこなすべきだ。だから俺達は、サウンドチェックの時に、KISSの曲を出来るだけ沢山プレイしているんだよ。そういう訳で…例えば"Got To Choose"なんかが、こういう風にプレイされるべきだったと俺が知っているとおりにプレイされ、それが本当に素晴らしく聞こえたりするのは、正直言って、最高だよ。俺は、何の価値も否定してはいないんだ。今なおこうしてメイクアップをしているのだから、オリジナルのラインナップの素晴らしさを少しでも否定するつもりはない。俺達は元に戻ってやるべきことをやり、それを成し遂げた。

俺達は、再び山の頂上まで登り詰めた。だが、更なる高みに進むことは出来なかったし、残念ながら、性格の問題と外部からの影響が原因となって、音のシナリオが狂ってしまった。それだけなんだ。あれは、現実になった夢だったんだよ。時代が一巡して輪が完成し、『Tiger Stadium』で幕が切って落とされて5万人の観衆が17年振りに姿を見せるバンドを待っているのを見た時はスリリングだった。このバンドにいた全員に俺は感謝しているし、良い音楽しか出てこないよ。

――動き始める時が来たんですね。

P：こういう風に言ったことがある。結婚が上手くいかない時は結婚相手と一緒にいたくないと思うかもしれないが、2人を結び付けるものはあるかもしれないし、子供がいることには感謝しているだろう。2人で素晴らしい子供を作ったのだから、そのことは誇りにするべきだ。

――バンドの活動ベースは、これから落ちていくと思いますか？

P：日本でツアーをするんだから、ベースが落ちているとは言わないだろ？　ツアーの頻度は多分低くなるだろうね。

――その理由は何ですか？

P：バンドの外に興味の対象があって、それは楽しみ、喜み、探るべき価値のあるものだからだよ。いつも言っているように、そこにリハーサルはないんだ。人生というのは、俺が知る限り、一度しかない。そして、自分の信念と経験から俺には判っているが、時間を必要とする興味の対象が他に色々とあり、俺はそれに時間を使いたいんだ。KISSを停止させるという意味ではないよ。ソロ・アルバムでツアーをするか…これは実際にやるつもりだが、あるいは、家族と一緒に家にいるか、ということだ。そういう贅沢をするために俺は働いてきたんだし、それが時ごとに感謝しているけれど、1つだけ理解しておかなくてはいけないのは、時間は過ぎていくものだということ。時間は貴重なものだということだ。だから、ベースを落とすということについては、唯一、ツアーを前ほど頻繁にはやらないという意味ではあり得るかもしれないけれど、ツアーをしなくなるということは絶対にあり得ないよ。

――例えば、エルトン・ジョンのように、ラスヴェガスの1つの会場で、週に5日間、1年を通してプレイする、というようなやり方について考えたことはありますか？

P：ああ、実際にそのことについて話をしているよ。俺達にそれをやってほしいという申し入れもいくつか来ている。俺がかつてはちょっと非現実的だと考えていたことが今はそうではなくなっているから、じっくり話を聞きたいと思っている。俺達がどこへ行くことになるのか、見極めなくてはいけない。俺はKISSを愛している。KISSにいることを愛している。だが、作り終えたばかりの自分のソロ・アルバムもとても気に入っているから、それを持って、いろんな場所にプレイに行きたい。素晴らしいソロ・バンドを組んで、日本に行って最高の時間を過ごしたいんだ。

――エキサイティングな人生ですね。美しい奥さんと結婚したばかりとし、子供も生まれる予定だし、1978年以来となる新しいソロ・レコードもあります。それらの総てを手にすることが出来る人はそんなに多くないですよ、ポール。

P：人生とは自分で作るものだよ。人生において、我々は、犠牲者になって自分の立場に愚痴をこぼすことも出来るし、それを変えることも出

来るんだ。過去に起こったことについて不平を言うことも出来るし、先に進むことも出来る。どちらかを自分で選べるんだ。俺は、自分の人生は自分で決めるものだと強く信じている。そして、その哲学が意味するのは、自分の人生で出来ることに境界線も制限も定めないということだ。仕事でも私生活でもだよ。そのアティチュードは、常にKISSの中にあり、また、俺の人生におけるアティチュードでもあるんだ。

――あなたが個人的にオーストラリアを愛していることは知っていますが、ツアーをするのが特に好きな場所はどこですか？

P：オーストラリアが大好きだよ。魔法のように魅力的な国だし、人々は素晴らしいし、女性達はゴージャスだし、常に俺のリストの上位にあるよ。それから、当たり前のことだから言うまでもないが、日本もいつも俺のリストの上位に入っている。日本では、俺達がアメリカ国外で騒がれるようになる前から、日本のバンドとは封開的なバンドの1つとして、俺達は騒ぎを起こし、熱狂的に愛されていたからね。最初のツアーは何もかもが俺の予想を超えていたよ。到着した時からそうだったし、武道館でショウを行なった時はBEATLESの記録を破ったんだ。ずっと変わらないファンからの献身と忠誠も、俺の心の準備が追いつかないくらいのものだったし、それは今に至るまで変わっていない。また日本に戻れば何が期待出来るか判っている。本当に、本当に素晴らしい感覚だよ。驚くようなことはないけれど、暖かくて安心出来て、我が家に帰るような気分だ。

――日本のファンは、本当の意味で熱狂的ですよね。人形を作ったり、豪華な食事に連れて行ってくれたり、空港やホテルで待っていてくれたりして、最高です。

P：ああ、彼らが俺のために作ってくれた人形はずっと持っていて、実は、今は息子の寝室に、何本ものギターと一緒に置いてあるんだよ。息子はギターを弾くからね。そして、彼の部屋のソファに座っているのが、そういう人形の1つなんだ。俺もああいう人形が大好きだから、もっと作ってくれ！　ステージに投げてくれ。もっとくれ！　俺は全部家に持って帰るよ。写真を撮れば、そういう人形の1つが、息子と俺がジャムっている様子を見守っているのが判るだろう。

――今年の夏にKISSは日本に行きますが、日本に行って東京でプレイしないのは随分久し振りになりますね。

P：そうだね。

――「UDO MUSIC FESTIVAL」のヘッドライナーとして、スピードウェイでプレイするそうですね。東京にとても近いというわけではありませんが、そこでコンサートが行なわれるのは、初めてなんでしょう？

P：ミスター・ウドーは我々のプロモーターであるだけでなく、俺やバンドの非常に親しい友人の1人としてずっと付き合ってきている。俺は彼のことを、友人としてもプロモーターとしても信頼しているよ。それが彼がやりたがっていたことであり、ベストだと思っていたことなんだ。俺は、喜んで彼の願いを叶えたいし、彼が自分の国でやるのに相応しいと思っていることをやるよ。

――大変な名誉ですよね。KISSにヘッドラインを務めてもらいたいと彼から言われたのですから。

P：そうだよ。非常に多彩な、幅の広い出演陣なんだ。素晴らしいことだと思う。ALICE IN CHAINS、PUSSYCAT DOLLS、GODSMACK、CLICK FIVE等がいるんだよ。本当に幅の広い顔触れなんだ。俺は、ミスター・ウドーが俺達にヘッドラインを務めてほしいと思ってくれたことがとても嬉しいし、光栄に思っている。日本に行く時に一番楽しみにしているものの1つが、彼と一緒に過ごす時間なんだ。俺達は一緒に出掛けるし、俺は彼を家族の一員だと考えている。彼はいつも俺に誕生日のカードを送ってきてくれるし、息子に贈り物を届けてくれる。彼は素晴らしい人だ。

――多様なバンドが登場するということですが、あなた達は、異なるタイプのバンドをブレイクさせることと無縁ではありません。最初はKISSのオープニングを務めていたバンドが今はマルチプラチナムを受賞するバンドになっていますよ。

P：そうだな、ざっと思い出せるだけでも、ボブ・シーガー、トム・ペティ、ジョン・クーガー・メレンキャンプ、JUDAS PRIEST、IRON MAIDEN、BON JOVI、MÖTLEY CRÜE、AC/DC、CHEAP TRICK、テッド・ニュージェント等をリストに加えることが出来るし、そのリストはもっと続くよ。

――KISSとCHEAP TRICKのツアーをもう一度ぜひ観たいですね。

P：そうだな。俺がいつかぜひやりたいと思っていることは…KISSとAEROSMITHのツアーを終えた時に、俺はスティーヴン・タイラーに言ったんだよ。俺達は何でこれをおしまいにするんだ？これは続けるべきじゃないか、と。あれは本当に素晴らしかった。だから、またいつか、あれを絶対にやりたいと思っている。

――それにしても、トミーは素晴らしいですね。彼は本当にこのバンドにぴったり合っています。

P：ああ、それに、彼はこのバンドに入った途端、確実に腕を上げたよ。以前の彼はこんな風にはプレイしていなかったからね。AEROSMITHのジョー・ペリーとブラッド・ウィットフォードがトミーの演奏を聴いて、「ワオ、彼は凄いな！」とブラッドが言ったのを覚えている。トミーは本当にこのチャンスを自分のものにし、人々が待ていた期待に充分に応えた。加藤、エリックもそうだよ。素晴らしいことだ。2日前に彼にEメールを送って、リハーサルを早く始めたくてうずうずしていると書いたところなんだ。

――あなた達のショウは、いつも時間どおりに始まりますね。あなた達は本物のプロフェッショナルですよ。

P：プレイし始めるはずの時間に開始しないなんて、ファンに対して失礼だよ。どうして、そんなことをやるんだ？

――GUNS N' ROSESが予定の午後9時ではなく午前4時にショウをスタートさせていた頃のアクセル・ローズについて、どう思いますか？

P：ファンも、もうそういうのは受け容れないと思うよ。ファンを侮辱するような行為は本質的にクールではない。彼らは必死で稼いだ金を払ってバンドを観に来ているんだ。我々は彼らを楽しませるためにそこにいるんだよ。だから、俺はそういう行為をクールだとは全く思わないし、ロックン・ロールだとも思わない。そういったものは超て、ロックン・ロールをパロディが漫画にしたものに過ぎないんだよ。嘆かわしいことだ。それに、そういうことをやるのは、稀だの場合、長く残らない奴らだし、ファンも一般大衆も遥かに早かれ本当のことに気付くよ。

――KISSには素晴らしい要素が沢山ありますが、あなた達が理想を持っているというのもその1つだと思います。あなた達は、素晴らしいバンドであるだけでなく、特別なものを創り出しています。KISSのように素晴らしいものは誰でも容易に創り出せるというものではありません。

P：ありがとう。

――このKISSというバンドが年を取らないのも、人々が飽きないのも、途方もなく凄いことですが、それは、今私が言ったような理由があるからかもしれませんね。

P：これは時間を超越したものだし、正直に言うが、俺は、自分が楽しめて、熱狂も楽しんでくれる限り、KISSをやり続けていくよ。そして、もしもそうならなくなった時には、別の誰かが俺のあとを継いでくれることを俺は祈る。

――今のブーツは、年月を経て軽くなってきましたか？　何か変化は？

P：俺の筋肉が増えたのかな。(笑)　いや、何も変わっていないよ。宇宙時代の特別な素材は使われていない。俺のブーツがどう見ても重いのは今になっても全く変わらないし、他の誰が履いてもとても危険だよ。

――トミーの話に戻りますが、あなたの左隣りにいる人物が素晴らしくて、自分のパートをきちんとこなし、しかも遅刻もしないということが判っていると、心配の種も減ったでしょうね。

P：そのとおりだよ。バンドというのは、ファンに敬意を返すだけでなく、メンバー同士も尊敬の念に近いものを抱いていなくてはいけないし、今の時点では、誰かから不足しているものを受け取る理由はどこにもない。誰かが時間どおりに現われないということが繰り返されてはいけないんだ。それは他のメンバーに対する侮辱だからだ。繰り返すが、他のメンバーのことを言っているんじゃないよ。俺のことを言っているんだ。俺はバンドの全員に敬意のお返しをしなくてはいけない。俺は、俺自身が自分に期待しないものを他の誰かに期待したりはしないよ。

――あなた達からファンに返している敬意は素晴らしいものですよ。それがあなた達が今のその地位を保っている理由の1つだと思います。

P：ファンがいなかったら俺達には何の意味もないよ。だが、同時に、KISSのファンの1人であるということはKISSがKISSであることを認めているのだということを常に理解しておいてもらわなくてはいけない。それが俺達がこのバンドをスタートさせた理由なのだから。"俺達"がなければバンドになれるようにね。

――あなた達が持ち続けているプロ意識はレヴェルが違いますね。ステージの上で汚い言葉を使わないし、唾も吐きません。あなた達は完璧なショウマンであり、総てが見事に効果を上げています。

P：罵る言葉で観衆を煽るのは誰にでも出来ることだ。それを使わずに上手くやるのには、技術と秘訣が要る。

――ステージであなたに起こった一番馬鹿げた出来事は何ですか？　あまりにも突飛で完全にクレイジーだったのであなたの記憶に残っているようなことは？　ジーンの髪に火が燃え移ったことを除いて、ですが。

P：笑えるようなことというテーマからはちょっと外れるかもしれないが、素晴らしいことはいくつか起こっているよ。ロック・バンドのバックステージで起こっていることには何の秘密もないが、しかし、実際のショウの間にも楽しく思い出す出来事が何回か起こっていると言っておくよ。(笑)

――読者に話しておきたいものは？

P：いや、ない。

――KISSが1972年に結成されたのではなく2006年に全く新しいバンドとして登場していたとしたら、それでもKISSは成功すると思いますか？

P：（しばらく沈黙して）イエス。

――どうしてそう思えるんですか？

P：何故なら、全身全霊を込めたものには確かな価値があるからだよ。やると決めたことに対する責任と信念に勝るものはないし、それに素晴らしい楽曲が合われば、負けるわけがない。俺がパンク・ムーヴメントに一度も足を踏み入れなかったのは、自分がやっていることに対する確信や信念だけでは充分だとは思わないからだ。箱の上でもステージの上でも、そこに上がって、大音量でギターを弾いたとしても、怖るしく下手クソだったら、その信念から怪しさは拭えない。俺がKISSはいつでも成功出来ると思うのは、何かに心底傾倒する愛情と献身に才能が加われば、間違いがないからだよ。

――曲作りといえば、あなた達はキラー・ソングをいくつか書いてきています。エディ・ヴァン・ヘイレンが昔、一番難しいのはヒット曲を書くことだと私に言ったことがあるのを覚えていますが、あなた達はヒット曲を山ほど書いていますね。

P：人気のある曲は、確かに山ほど書いてきたよ。ラジオのトップ10に入るという古典的な意味でヒットだったかどうかは別にして、俺はいつも、受け容れやすくて覚えやすくて親しみを感じ、セカンド・ヴァースは実際に一緒に歌えるようになっている曲を書くよう努めている。いつもアコースティック・ギターで書くようにしているのは、1本のギターで素晴らしい曲に聞こえない曲は、単に素晴らしい曲ではないんだと思うからだよ。素晴らしい曲というのは、アレンジの問題ではないんだ。素晴らしい曲で素晴らしいのは、曲そのものさ。PINK FLOYDは、見事にプロデュースされ、非常に雰囲気があり、音響的にも素晴らしい曲を沢山作っているが、それらの曲自体がそれぞれに宝石のように美しい。大胆に言ってしまえば、真の魂を磨くことは出来ないよ。（笑）

俺の場合、曲を書くなら、1本のギターで素晴らしく聞こえる曲でなくてはいけない。家だろうとどこだろうと、素晴らしい曲に聞こえないものは良い曲ではない。嘘は磨けば隠せる。プロダクションでごまかせると考えながら、嘘のある曲を書いてはいけない。

――ジョン・カロドナーも、A&Rとして曲を聴く時について、同じようなことを言っていましたよ。彼は自分の車の中で聴くそうです。自分の車の中で良い曲に聞こえないものはどこで聴いても良い曲には聞こえないと彼は言っていました。

P：よく、俺の家にはスタジオのようなものがあるのかというようなことを訊かれるけれど、記憶にある限り、俺は、どこのドラッグストアでも買えるような、小さなスピーカーが1つ付いただけの、39ドルのカセット・テープ・レコーダーで、ずっと曲を書いているよ。

――本当に？　何故ですか？

P：素晴らしい曲というのは、最も基本的な形でレコーディングされるだけでいいからだよ。それ以上のことは必要ない。デズモンド・チャイルドが来ても、同じことだ。素晴らしい曲にスタジオは必要ない。デモを録る時は、また別の話だが、曲を書く時に必要なのは最もシンプルな道具だよ。

――あなたが曲を書く時の特別なやり方というのはありますか？

P：良いアイディアがあれば、それを最初から最後まで興味深いものにするだけだよ。無関係なものは全部取り除く。余分な脂肪は切り取ってしまう。必要のないものはカットだ。ミケランジェロは石の塊から男の彫刻を仕上げる方法を訊かれたことがあると思うんだが、確か彼は、男に見えない部分を全部切り取ってしまうだけだと言ったんじゃないかな。（笑）

――（笑）スティーヴン・タイラーは喉に問題を抱えていたことがあります。あなたはどうですか、あなたの喉は、ステージで高音をファルセットで歌うことで痛んだことはありませんか？

P：ないね。多分5年ぐらい前だったと思うけれど、かかりつけの喉の専門医にキーを下げているかと訊かれたことがあるんだ。つまり、歌いやすくするためにキーを低くしているか、という意味だ。俺は、低いキーだって？　今よりもっと高くしても歌えるよ！と答えた。AEROSMITHとツアーをした時、スティーヴンは、1日プレイして1日オフというやり方を強く希望した。俺は言ったんだ。スティーヴン、俺達は週に4回から5回ショウをやっている、と。週に5回のショウで、毎晩2時間半歌っていたんだ！　1日やって1日休みだなんて、俺にとっては休暇のようだよ！

――（笑）あなたは喉のウォームアップやクールダウンをやるのでしょうか？

P：やっている。スティーヴンもやっているよ。皆、やっている。ウォームアップをやらないシンガーは、あまり知らないな。

――日本で出たばかりの新しいDVD「ROCK THE NATION！LIVE！」の話をしましょう。収録されているプロダクションは物議を醸すものです。KISSは安っぽいことはやりませんから。でも、日本盤のパッケージにはボーナスCDも入っていますね。何故、日本のファンのためにだけ、ボーナスCDを付けるのですか？

P：日本の俺達のファンは、いつも、彼らだけのための特別なパッケージを手に入れたいと非常に非常に強く望んでいるんだ。今回は喜んでそれに応じることにしたよ。エクストラな映像と曲があったからね。

――KISSは今もレーベル契約があるのですか？どこかのレコード・レーベルと契約していますか？

P：いや。

――DVDに「KISS Records」とあるのに気付いたので、素晴らしいと思いましたよ、とっくの昔に起こっているべきことですが。

P：そうしたのは、基本的には、今の時点では「Sanctuary」との契約でも誰との契約でも、俺達が全部をコントロールしていたいからだよ。それに、理由もないのに誰かと組んでいなくてもいい権利が今の俺達にはある。

――それで、今、このバンドは、新しい曲を作ってはいないし、新しいアルバムをリリースすることに興味もない、と考えていていいでしょうか？

P：俺はそれをやることに反対ではないよ。このバンドでスタジオに戻るのに相応しい状況になれば、反対はしない。

――ええ、でも…。

P：俺に言えるのはそれだけだ。相応しい状況になって、相応しい……

EXCLUSIVE INTERVIEW WITH

TOMMY THAYER

PART 1 ■■

by JOHN "SHOOTER" HARRELL/BURRN!(USA)

"エース・フレーリーの代役を果たす男"の栄光と苦悩とは…？
遂に実現したトミー・セイヤーの初インタビューを2ヵ月連続掲載！

――あなたがKISSに入って3年ですね。

トミー・セイヤー（以下T）：3年か、4年だな。それは、どれを正式に俺の最初のショウと考えるかによって、変わるんだ。

――オーストラリアでの「KISS SYMPHONY」のショウが最初だったのでは？

T：正式にはね。でも実質的には、その前の年の2002年にも2回プレイしていたんだ。ジャマイカでのコンサートが1回あって、それはプライヴェートなパーティだった。それがメイクとコスチュームを着けてやった初めてのショウだよ。それから、TV番組もあった。「DICK CLARK'S AMERICAN BANDSTAND」の50周年記念番組と、「THAT 70's SHOW」に出たんだ。2002年はKISSはツアーをしなかった年で、時々そういうのをやっていた。だからバンドに入り込みやすかったし、髪を伸ばす時間もあった。（笑）　2003年には、加藤、「KISS SYMPHONY」をやったし、それから、夏にはAEROSMITHとのツアーが始まり、その年の終わりまで続いたけど、その頃には快適な気分でバンドにいることが出来るようになっていた。最初は「Oh,my God！」という感じだったけどね。本当にこれをやっているんだというショック、大変な仕事を引き受けたという事実に圧倒されていた。特に「KISS SYMPHONY」は凄いプレッシャーがあったよ。4万人の大観衆を迎えて、シンフォニーと一緒にアコースティック曲もやり、複雑なハーモニーもヴォーカルも全部やらなくてはいけない状態で、DVD用の撮影とライヴ・アルバム用の録音が行なわれていたんだから。何だ、これは！という感じだったよ。でも、自分としては良い仕事が出来たと思うから、今振り返ると誇らしいね。

――KISSのカヴァー・バンドのCOLD GINをやっていたあなたが、本物になった心境は？

T：説明するのは難しいよ。KISSの熱心なファンにとっては神聖なものだからね。俺がこれをやっているなんて信じられない！という感じだ。子供の頃のクリスマスより良いものだよ。特別なんだ。俺は、気軽に受け止めてはいない。自分にやれていることがとても嬉しいし、幸運だと思っている。驚いてもいる。10年前にはCOLD GINでエースのメイクとコスチュームを着けてプレイしていたから、やり方そのものは判っていた。でも、ドレッシング・ルームで、ジーンやポールと一緒にメイクをしていると、これはクレイジーな夢か何かに違いないと思ってしまう。何人のKISSファンがこの状態を夢に見たと思う？　ファンの中には、俺はエースのメイクと衣装を着けるべきじゃないと言う連中がいる。でも、単純に考えてみてくれよ。スペースマンのメイクをしてKISSのリード・ギタリストになるチャンスが与えられたら、まさか、そのチャンスを放棄する奴はいないだろう？

――でも、神聖なものだと判っているからこそ、ためらう気持もあったのでは？

T：俺もファンの1人だから、「やるべきじゃない」という人の気持も判るし、当事者じゃなかったら、俺も同じように考えたかもしれない。でも、KISSがオリジナルの4人だったのは30年前のことだというのを理解しなくてはいけない。あの4人でやっていくのは、もう不可能なんだ。10年前にリユニオンをやったけど、あれも過去のことであり、もうやれないというのが事実だ。その事実を受け容れるべきだよ。今は、本当にプレイ出来て、そこには最初にあったのと同じエネルギーがある。だから、良いことなんだよ。

――あなたがエースのメイクをしていることで、文句を言ってくる人は多いのですか？

T：そういう人達もいる。でも、まず言っておきたいのは、KISSを観る若い人達の大多数は、それがエースが誰か区別が付かないということだよ。彼らにとっては、そこにいるのはあのメイクをしたリード・ギタリストでしかないんだ。古くからのファンの中には、それを不快に思う人達も確かにいるよ。クールじゃないと声に出して言う人達もいるし、俺は俺独自のメイクをするべきだとか、今のバンドはそもそもメイクをするべきではないという風に考える人達もいる。でも、多くのファンは応援してくれているし、最後の2回のツアーでのエースは駄かったと言っている…俺が言っているんじゃないよ。（笑）　ただ、そういう声を聞いた、と言っているだけだ。俺はエースを愛しているよ。でも、現実的に考えている人の方が多いし、そういう人達は、本当に凄いショウができて、ヴァラエティに富んだKISSの曲がプレイ出来るKISSの方が良い、と考えているよ。

――リユニオンの時、エースに彼のパートを教えたのはあなたですが、今のあなたは、本人よりずっと上手くエースをやっています。

T：そう言われることは多いし、褒め言葉だと受け止めている。でも、エースを最初に創り出したのはエースだということを忘れることは出来ない。

――エースである努力をしていますか？

T：いや、大事なのはこの音楽をプレイすることで、ステージの上では彼の真似をやり過ぎないように心掛けているんだ。じゃないと、下手なパロディに見えてしまうからね。だから、少しだけ自分らしく、そして、少しだけスペースマンのヴァイブを備えた状態でいるようにしている。

――あなたのギターにはパイロテクニックの仕掛けはないし、特殊効果も使っていませんね。

T：そこなんだよ。それは俺達が真剣に考えたことなんだ。最初は曲をプレイするだけでクールだったけど、しばらく経つと、皆、もっと欲しいと思うようになる。エースにあった個性のようなものが俺にはまだないから、俺にも何らかの特殊効果が必要になってくるだろうね。

――DVDの「ROCK THE NATION！LIVE！」は、あなたがプロデュースしたんですよね。

T：ああ。これだけじゃなく、これまでに3枚か4枚のDVDを手掛けているよ。「KISS SYMPHONY」も俺がやったけれど、クレジットはされていない。あれには多分、俺の名前を出したくなかったからだと思う。ギタリストとしてバンドに入ったばかりだったから。

――映像の仕事を始めた切っ掛けは？

T：1995年に「KISSコンヴェンション」をやった時…当時、俺はKISSのツアー・マネージャーみたいなことをやっていたんだけど、ある日、ポールが「KISSコンヴェンション」のTV用CMを作る手伝いをしてくれと言われてね。ポールに「俺は用事がある。あとはお前がやれ」と言われて。途中まで編集が進んだCMを、俺が完成させたんだ。それが切っ掛けで、俺は突然、KISSのビデオ部門の責任者みたいになっていった。

――KISSの組織の中で、確実に昇進しましたね。

T：まったくだ。（笑）

――計画どおりですか？（笑）

T：いやいや。俺は長期的な計画を立てたことはないんだ。短期間の目標を決めてやっていけば、人生というのは自然に色々なことが起こるものだと考えているからね。少しずつ何かに向かって進んでいけば、突然KISSのメンバーになっていたりする。（笑）　KISSに入るつもりなんて俺には全くなかったんだよ。BLACK N' BLUEの後、小さなバンドを2つほど経験して、こんなことをやっていてはダメだと思ったんだ。成功した人生を送りたいが、ギターを弾いていたのでは、そんな生活は遠くなるだけだ。だから俺は、裏方の仕事をするようになったんだよ。

KISSとの仕事は、1994年の「KISSTORY」でフォト・エディターとしてパートタイムで関わったことから始まった。何とかして稼がなくてはいけなかったし、建築の仕事も1年ぐらいしていたから、ロック・バンドの仕事が出来るだけで嬉しかったんだ。それが切っ掛けで、俺はパートタイムでジーンとポールのために文字どおり"何でもやる"ようになった。最初はKISSとは関係ない仕事もしたんだよ。ポールの家のペンキ塗りを手伝ったり、ジーンの家の屋根の掃除に駆まった葉を取り除いたりもした。やがて、俺が働き者で献身的で責任感があり、さらにKISSのことをよく知っているということが彼らに判り、様々な問題を解決したり、調整したり、プロジェクトを手掛けたりといった仕事を自分達のためにやれる男がここにいるぞ、ということになったんだ。その男はKISSの組でを知っていしし、本当に働き者だから、ということでね。自然にそうなったんだよ。

「KISSコンヴェンション」では、俺は1日に20時間働いた。まさに、KISSの大ファンの俺にぴったりの仕事だったからね。俺は偶然、最高のタイミングで最高の場所にいたというわけさ。それから、その翌年にリユニオンが実現して、そこからさらに発展していった。俺は椅子を壁っていった感じだったけど、KISSのギタリストになるなんて大きな目標はなかったよ。ミュージシャンを辞めるつもりで始まって、結局こうしてギターを弾くようになったのは、皮肉だよね。裏方の仕事をやることに心から満足していたのに。（笑）

――KISSにいて一番心配なのは何ですか？

T：いつかエースが戻ってくるかもしれないという可能性は、いつだってあるんだ。それが心配の種というわけではないけれど、そんなに楽しみにしていることでもないね。（笑）

――では、このバンドにいて最も難しいことは？

T：俺にとっては、エースというキャラクターになってステージに立っているのと同時に、トミー・セイヤーでもあるというその境界線を、どのように行き来するか、だな。エースの物真似にはなりたくないからね。それが、多分、皆が思うよりずっと難しい状態だよ。その境界線は微妙で繊細なものなんだ。写真だって、どういう風に写りたいか決めるのは難しい。ジーンとポールからは、ただ俺らしくしていろと言われた。エースのポーズを取ったり表情を作ったりしても、上手くいかないだろうからね。俺にとってはそれが一番のチャレンジだし、いつも意識している。

――新しいレコードの話題は出ていますか？

T：俺もエリックもプッシュし続けている。新曲を出すことは、とても大事だと思うからね。DVDを出すのも良いけれど、新しいレコードも出すべきだと思うし、それは彼らにも判っていると思うよ。でも、今は、その優先順位は高くないんだ。（以下、来月号に続く）■■

※トミー・セイヤー独占長尺の後半は来月号に掲載します　お楽しみに！

BACK FOR MORE ➡ Interview with Paul Stanley：1995年2月号/10月号/1996年5月号/12月号/1997年1月号/5月号/1999年7月号/12月号/1999年2月号/9月号/11月号/2000年2月号/2002年5月号/10月号/2003年7月号/2004年5月号/2005年4月号/2006年7月号/2007年3月号/2008年2月号/3月号/2009年1月号/2003年8月号/2002年1月号/2003年5月号/2004年3月号/5月号

――ジーンのTV番組の合間を縫ってスタジオに数日間入ることは、もしかしたら可能かもしれませんね？（笑）

P：（笑）

――トミーとエリックが入って、新しい炎がバンド内で燃えているはずですよ。彼らはやりたくてうずうずしていますから。

P：ああ、トミーは凄くやりたいだろうね。

――でも、勿論、あなたはKISSのメンバーですから、従うべき伝統があるし、これまでの財産と関連性のあるものにしなくてはいけません。

P：そのとおりだよ。だからこうして、時期が適切でなければいけない、状況が適切でなければいけない、適切でないことをやるべきではない、特に、"KISS"という名前を付けてやるものなら、と言っているんだよ。

――トミーがあなた方の新しいビデオ作品をプロデュースしていますが、どうですか？

P：トミーは長時間のビデオをまとめるのがとても上手い。かなり前から我々のビデオを手掛けているよ。誰もがそれぞれに才能を持っているのだから、それを使わない手はないだろう？　しかも、彼のその才能はとても素晴らしいし、このバンドを彼なりに把握している分、他の誰かがやるよりも短時間でやれているだろう。

――彼のその分野での才能と有能さは、彼が、33年前にあなた達がスタートした時からこのバンドのファンだという事実のおかげだと思いますか？

P：そうだね。彼はKISSに入ったKISSファンなんだ。俺はKISSをスタートさせたKISSファンだよ。（笑）だが、彼が新たな視点を持ち込んでくれるのはとても良いことだ。

――あなたのソロ・レコードのことを少し教えてください。全部自分で書いたのですか？　曲は前から書いてあったものですか？　前のソロ・レコードから28年も掛かっているわけですが。

P：俺は昔書いた曲に新しい塗装を施して使うのは好きじゃないんだ。どの曲もこのアルバムのために書かれたものだよ。

――では、いつ、ソロ・アルバムを作ろうと決めたのですか？　そして、何故、ソロ・アルバムを作る必要があると考えたのですか？

P：他の人達がプレイするための曲を書くのではなく、俺が書いた曲をミュージシャンを呼んでプレイしてもらえるアルバムを作りたかったからだよ。何の制約もなく、このバンドのために頑張しいことは何だろうと考える必要もない、自由な状態でやりたかったんだ。

――バンド全体のことを考えなくてもいいし、完全に自分がコントロール出来て、他の3人を喜ばせることよりも自分がどう思ったかだけを気にしていればいいという、いつもと違う状態は気に入りましたか？

P：バンドと一緒にスタジオにいる時でも、俺は、全員が車に乗り込んで同じ場所を目指すのが好きだが、誰かが運転席に座らなくてはいけない。だから、全員で手を挙げて意見を一致させたり、多数決を取ったりすることはないわけだ。だが、ソロ・アルバムの制作は、何故俺がこれをやりたいのか、あるいは別の誰かが書いた曲を外さなくてはいけないかといった説明をする時間は省ける。これは、今の俺を、何の制約もない状態で見ているアルバムだ。

――このアルバムは1978年のアルバムとは違ったものになるという考えはありますか？

P：ああ、全く違うよ。作っているのは明らかに同じ人間だし、考え方は似ているかもしれないという懸がりはある。だが、音の白黒写真とIMAXぐらい違っているよ。かなり幅が広くなっているし、完全に実行出来ているものもずっと多い。

――どういう作品なのですか？

P：とてもパワフルで、とてもキャッチーだ。

――ポップ志向が強いのでしょうか？

P：そうは思わないよ。だから、レトロ・アルバムではない。前にやった何かを再現しようとはしなかった。同じ感性は維持したかったけどね。

――比較しなくてはいけないとしたら…？

P：困ったな、出来ないよ。スタジオに皆に来てもらって、彼らにこれはどうだと聞いたら、素晴らしいとしか言えない、と言われたよ。

――ロック・アルバムではあるのでしょう？

P：ああ、完全にそうだよ。

――感傷的なバラードのアダルト・コンテンポラリーではない？

P：バラードも入っているが、"バラード"と"凄々しいバラード"には違いがあると思う。ビッグなオーケストラとビッグなパワー・コードを使った曲もあるし、ストリングスとアコースティック・ギターを使った曲もあるが、いずれにしても、レトロじゃない。

――70年代の雰囲気は全くない？

P：ないよ。過去を繰らせる必要がどこにある？　やっていることは何かの再現ばかりだからか？　俺は自分のルーツにどっぷり浸かっているし、どこが俺の出発点だったか、そこに誰がいたかは、聴けば明らかに判る。だが、それを古いアルバムに入っていたものだと思う人は1人もいないよ。

――そのソロ・アルバム「LIVE TO WIN」は、いつ出るのですか？

P：来週あたりには契約書にサインをすることになると思う。このレコードのために、単なる契約以上のものが得られる場所を絶対に見つけるつもりだったんだ。現場の人達、実際に外に出ていってこれを売り込む人達が、これを好きになってくれる会社と組むつもりだった。俺は全力で素晴らしいアルバムを作るのだから、小切手の数字だけが理由でそれを誰かに渡すくらいなら、裏庭に埋めてしまった方がマシだよ。

――このアルバムでツアーをする予定だという話でしたね？

P：そのつもりだ。

――今日の最後の質問です。バンドの初期に、メンバーがメイクをしていない写真を全く撮られなかったのは、一体どうやっていたのですか？　素顔の写真を決して撮られないようにするのは世界最大の苦痛だったに違いありませんね。

P：いつも周りに誰かを置いて、写真を撮られるのを防いでいたし、俺達は意図として神秘性を保つつもりだったからね。そう、あれは24時間休みなしの仕事だったよ。■■

KISS日本公演
問：ウドー音楽事務所
☎03-3402-5999

《単独公演》
●7/18（火）名古屋・レインボーホール
●7/20（木）福岡・福岡国際センター

《UDO MUSIC FESTIVAL 2006》
●7/22（土）大阪・泉大津フェニックス
●7/23（日）静岡・富士スピードウェイ

※7月22日の大阪と23日の静岡は両日ともKISSがヘッドライナーの野外フェスティヴァル。KISS以外の出演者はALICE IN CHAINS、スティーヴ・ヴァイ、セバスチャン・バック、GODSMACK、PORCUPINE TREE、TRIBE OF GYPSIES他。開演11:00、終演予定21:00。詳しくはウドー音楽事務所☎03-3402-5999またはhttp://udofes.jp/まで。なお、『UDO MUSIC FESTIVAL 2006』は2ヶ所同時開催で、22日の富士スピードウェイと23日の泉大津フェニックスにはSANTANA、DOOBIE BROTHERS、ジェフ・ベック、ヌーノ・ベッテンコート他が出演する。

KISSプレゼント大放出！
→最新KISS関連グッズの数々を読者の皆さんにプレゼント！　P.117のプレゼント・コーナーを御覧ください

2006.6.7 On Sale!!!!!

MOTLEY CRÜE
Carnival Of Sins Live
UICD-12067 ¥3,150（Tax In） 2CD'S!!! & Enhanced Video

CD-1
1. Shout At The Devil
2. Too Fast For Love
3. Ten Seconds to Love
4. Red Hot
5. On With The Show
6. Too Young To Fall In Love
7. Looks That Kill
8. Louder Than Hell
9. Live Wire
10. Girls, Girls, Girls
11. Wild Side

CD-2
1. Don't Go Away Mad (Just Go Away Mad)
2. Primal Scream
3. Glitter
4. Without You
5. Home Sweet Home
6. Dr.Feelgood
7. Sense Of Sensation
8. Sick Love Song
9. If I Die Tomorrow
10. Kickstart My Heart
11. Helter Skelter
12. Anarchy In The UK

Video
Too Fast For Love
Dr.Feelgood
Promotional Spot

DEF LEPPARD
Yeah!
2006.6.14 (TBA)
UICP-1045 ¥3,045（Tax In） Japan Only Bonus Tracks!

1. Hellraiser
2. Rock On
3. 20th Century Boy
4. Drive On Saturday
5. 10538 Overture
6. No Matter What
7. Streetlife
8. Step On
9. Waterloo Sunset
10. Hangin' On The Telephone
11. The Golden Age Of Rock
12. Lil' Bit Of Love
13. Don't Believe A Word
14. Stay With Me
15. American Girl *
16. Search and Destroy*

* Only Japan Bonus Track

VALENTINE
The Most Beautiful Pain
UICP-1128 ¥3,045（Tax In） Japan Only BIG Bonus 3Tracks!

1. I Should Have Known Better
2. A New World
3. I'm Going Under (Sedated)
4. One Of These Days
5. The Cold And Lonely Life
6. Sole (Abandoned Heart)
7. Magnetic Optic
8. Everyday Hero
9. Supernova
10. Magical Memories
11. How Many Times
12. Mickey
13. How Can I Live Without You
14. One Heart
15. Back To The Future Theme
16. Now Or Never
17. Exodus Elaborates... I Can't Get Over You
18. The Way To Euphoria *
19. Can't Take No More *
20. How Do You Sleep At Night *

* Only Japan Bonus Track